

## 流通古文化財について (1)

— 「漢委奴國王」金印誕生時空論のために —

工芸文化研究所 鈴木 勉

## 1. 20 世紀と 21 世紀の流通古文化財

福岡市立博物館が平成 10 年度 (No.001~231 の 231 顆)、12 年度 (No.600~632 の 33 顆)、13 年度 (No.495~522 の 29 顆) に購入した 299 顆の調査を行った。その観察結果を報告する。今回の報告は、概寸 30 mm 角以下の白文角形の印章に絞って、溝の形成技術について考える。なお、本稿では福岡市立博物館が購入した古印群を便宜上「21 世紀の流通古文化財」と呼び、大谷大学蔵印や早稲田大学会津八一記念博物館蔵印 (『「漢委奴國王」金印・誕生時空論 — 金石文学入門 I —』150 頁の図 92 マトリックス図の J 群を指す) を「20 世紀の流通古文化財」と呼ぶ。21 世紀の流通古文化財の中には 20 世紀の流通古文化財も含まれていることが想定される。

調査日時：2013 年 4 月 13,14 日

調査者：鈴木勉、キムドヨン

調査用具：等倍マクロレンズ、一眼レフカメラ、デジタルマイクロスコープ

## &lt;観察結果&gt;

白文角形の印章は、平成 10 年度分 231 顆中 154 顆、平成 12 年度分 33 顆中 19 顆、平成 13 年度分 29 顆中 23 顆の合計 196 顆である。その中から特徴的な溝の印章を挙げる。

## (1) 二段彫りされた溝を持つ印章

	番号	印文	鈕形態素材	備考		番号	印文	鈕形態素材	備考
1	No.002	日敬母治	壇鈕銅印	U字溝彫	24	No.176	劉長公	亀鈕銀印	鉢彫り
2	No.019	正行	壇鈕銅印	U字溝彫	25	No.177	武昌祭酒	亀鈕銅印	U字溝彫
3	No.023	上官憲	壇鈕銅印	U字溝彫	26	No.179	駱宣印信	亀鈕銅印	U字溝彫
4	No.030	樂水儻	壇鈕銅印	U字溝彫	27	No.186	李音私印	亀鈕銅印	U字溝彫
5	No.043	倫	壇鈕銅印	U字溝彫	28	No.196	王欽私印	亀鈕銅印	ボールU字
6	No.044	思言敬事	壇鈕銅印	U字溝彫	29	No.202	范克國印	伏獸鈕銅印	U字溝彫
7	No.045	市王	壇鈕銅印	U字溝彫	30	No.206	呂晏私印	辟邪鈕銅鍍金印	ボールU字
8	No.047	駱敦胡	壇鈕銅印	U字溝彫	31	No.217	李□	穿帶銅印	ボールU字
9	No.048	張桀	壇鈕銅印	U字溝彫	32	No.218	趙謝臣謝	穿帶銅印	U字溝彫
10	No.051	張仁	壇鈕銅印	U字溝彫	33	No.495	繆容□□	壇鈕銅印	ボールU字
11	No.052	李成	壇鈕銅印	U字溝彫	34	No.506	□□	鱗鈕銅印	ボールU字
12	No.054	王宦	壇鈕銅印	U字溝彫	35	No.519	漢廬水佰長	駝鈕銅印	ボールU字
13	No.055	楊醋	壇鈕銅印	U字溝彫	36	No.600	奉車都尉	亀鈕銀印	U字溝彫
14	No.057	□□	壇鈕銅印	U字溝彫	37	No.607	皖左尉印	瓦鈕銅印	U字溝彫
15	No.059	張山	壇鈕銅印	V字溝彫	38	No.615	劉織印信	辟邪鈕銅印	U字溝彫
16	No.060	梁□誰	壇鈕銅印	U字溝彫	39	No.618	韓賞印	熊鈕銅印	ボールU字
17	No.070	敬	壇鈕銅印	U字溝彫	40	No.619	韓中君	熊鈕銅印	ボールU字
18	No.111	私印信吏	鼻鈕銅印	U字溝彫	41	No.620	楊興私印	獸鈕銅鍍金印	U字溝彫
19	No.112	司馬胶	鼻鈕銅印	U字溝彫	42	No.622	杜自為印	獸鈕銅印	U字溝彫
20	No.114	彭沮	鼻鈕銅印	U字溝彫	43	No.623	方倩私印	獸鈕銅印	U字溝彫
21	No.121	假司馬印	鼻鈕銅印	U字溝彫	44	No.624	相里得士	鼻鈕銅印	U字溝彫
22	No.122	別部司馬	鼻鈕銅印	鉢彫り	45	No.625	倉皇	鼻鈕銅印	U字溝彫
23	No.123	軍假司馬	鼻鈕銅印	鉢彫り	46	No.631	魏率善羌邑長	駝鈕銅印	U字溝彫

&lt;凡例&gt; No.: 福岡市立博物館所蔵番号 (常松幹雄論文、大塚紀宜論文参照)

ボール：ボールエンドミルの使用が疑われる  
溝彫：溝たがね、丸毛彫りたがね、ボールエンドミルによる切削加工で成形されたと考えられる加工法  
U字：溝断面形状がU字形であることを示す  
2016年12月2日現在調査継続中、二段彫りやボールエンドミル使用の例はまだまだ増える見込み

多くの印章の溝が、箱彫り、鉢彫りなどで彫り込まれているが、二段彫りされた溝の断面は、図1のようになっている。図2から図6は二段彫りの例である。

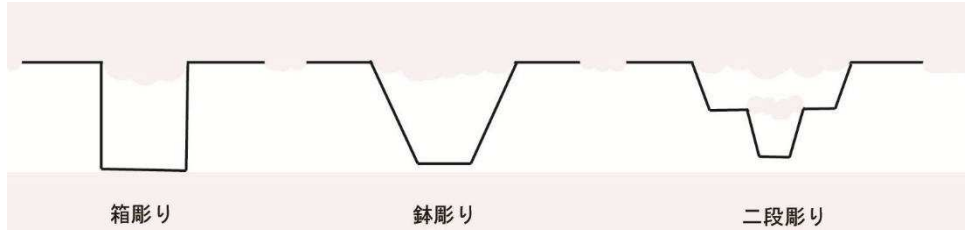


図1 箱彫り、鉢彫り、二段彫りの断面図



図2 No.19 「正行」壇鈕銅印の二段彫り



図3 No.23 「上官憲」壇鈕銅印の二段彫り



図4 No.519 二段彫り (白矢印) とボールエンドミル (?・黒矢印) の加工痕

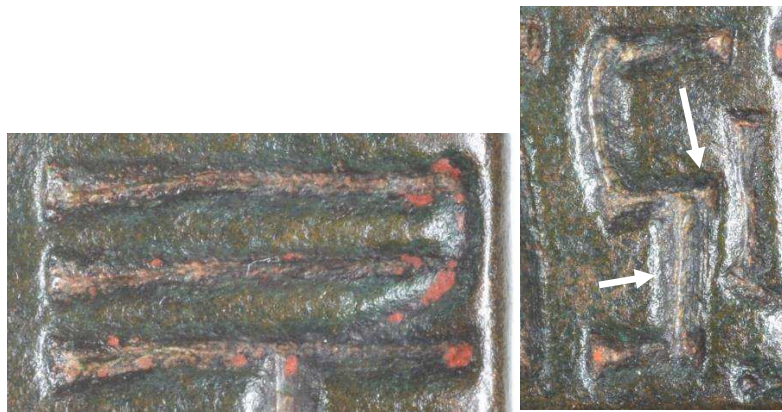


図5 No.631 「魏率善羌邑長」駝鈕銅印の二段彫り

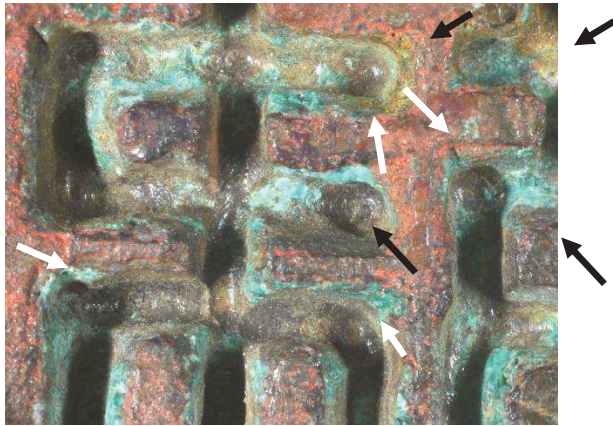


図6 No.619「韓中君」熊鈕銅印の二段彫り（白矢印）とボールエンドミル（？・黒矢印）の加工痕



図7 ボールエンドミル

封泥印としての利用は東晋の頃までとされる<sup>1</sup>。二段彫りは、封泥印には全くそぐわない。これらは現代の製作の可能性が極めて高い。

(2)ボールエンドミルの使用が疑われる加工痕

数点の印章の中に、現代のボールエンドミル（図7）が使われたのではないかと疑われる加工痕が見られる（図4、図6参照）。ボールエンドミルは昭和になって多く使われるようになった工作機械用の工具であり、できあがる溝の断面形状はU字形となる。また、フライス盤であれば刃物が固定で加工テーブルに載った印章が前後左右に動き、彫刻機であれば、印章が固定で刃物が動く。この場合、テーブルが止まったときかまたは刃物が止まったときに、ボールエンドミルが印章に深く食い込む。その痕跡と判断される半円形の凹みが文字線の端部などに多く見られる。これが現代の製作と疑われる加工痕である。

(3)U字形の溝断面形状

21世紀の流通古文化財には、U字形の溝断面を持つものがとても多い。299顆中、白文角形の印章は196顆、そのうち概ね187顆がU字形の溝断面を持ち、V字形の溝断面8顆、鉢彫り1顆の構成となっている（調査中のため概算）。この構成割合を他の印章と比較してみる。

表2 溝断面の形状の構成割合の比較

	U字形	V字形	鉢彫り	箱彫り
21世紀の流通古文化財（福岡市博購入の印章）	187(95%)	8(4%)	1(0.5%)	
20世紀の流通古文化財（マトリックス図J群）	4(31%)	8(61%)	1(8%)	
中国博物館古代金属製印章（マトリックス図C群）	2(15%)	8(61%)	<1>	3(23%)

20世紀の流通古文化財（『「漢委奴國王」金印・誕生時空論』150頁図92マトリックス図のJ群）

21世紀の流通古文化財の溝断面形状がU字形に偏っていることが分かる。出土品がその多くを占めるのであれば、構成比率はほぼ近い値を示すはずである。このことから20世紀の流通古文化財製作集団と21世紀の流通古文化財製作集団は異なる集団であることが推定できる。21世紀の流通古文化財にU字

<sup>1</sup> 中田勇次郎

形の溝断面が多いことは、前述したボールエンドミル(?)の使用と合致する。

(4) V字状打ち込みたがね痕 (蹴り彫り技法) について

印章は、文字線の端部にV字状打ち込みたがねを使用する例が多い。21世紀の流通古文化財にも20世紀の流通古文化財にもある(図8、図9など)。V字状打ち込みたがねは、凹線を形成することも可能で、短い凹線はV字状打ち込みたがねの向きを180度変えて二度打ち込み線としている(図9)。



図8 福岡市博蔵No.600



図9 大谷大学蔵No.366



図10 大谷大学蔵No.354

また、V字状たがねを連続的に打ち込む線彫り技法も見られる。ところがV字状たがねによる線彫り技法は、管見では大谷大学蔵古印(図11、12)と早稲田大学会津八一記念博物館蔵古印(図13)、つまり20世紀の流通古文化財に限られる。13例中5例であるから看過できない。前頁のマトリックス図の「文字線の技法」「打込」に分類したものがこれである。その他のA群、C群、E群の印章には見られない技法であり、21世紀の流通古文化財にも見られない。V字状たがねによる線彫り技法は20世紀の流通古文化財の特徴の一つである可能性がある。



図11 大谷大学No.354「帰趙侯印」の打ち込みたがね痕

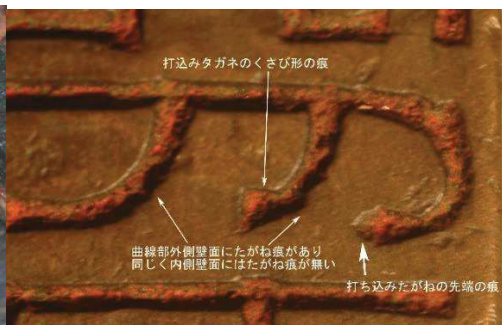


図12 大谷大学No.355「親趙侯印」のV字状たがね痕



図13 早稲田大学会津八一記念博物館蔵「部曲督印」のV字状たがね痕

**図92 東アジア金属製印章の技術のマトリックス図**

記号	名称	印面												
		文字線の溝				印面		文字線の加工法						
		溝の断面形				印面の仕上げ	印面四辺の高い直線度	技法			溝彫りたがねの使用	腰取りたがねの使用	溝底部へのへら掛け	
		箱彫	鉢彫	薬研	丸彫			浸い	線	鑄造				打込
<b>国内の中国古代金印など(A)</b>														
A①	漢委奴國王		鉢			○	○	○				?	○	○
A②	廣陵王璽		鉢			○	○	○	○			○		×
A③	平阿侯印			∨		○	○	○	○					×
A④	関内侯印			∨		○	○	○	○					×
<b>中国の博物館の古代金属製印章(C)</b>														
C①	中戩室鈐		鉢		U		○	○						—
C②	鄧室畏戸之鈐				U	○	○	○						—
C③	滇王之印						○	○				○	○	?
C④	文帝行璽	箱					○	○				○	○	○
C⑤	泰子	箱				○	○	○				○	○	○
C⑥	関内侯印			∨		○	○	○				○	○	—
C⑦	関中侯印			∨		○		○					○	—
C⑧	魏婦義氏侯			∨				○						—
C⑨	晋婦義羌侯			∨		○		○					○	—
C⑩	晋婦義氏侯			∨		○		○					○	—
C⑪	関中侯印			∨			○	○					○	—
C⑫	宣成公章			∨		○	○	○					○	—
C⑬	鎮南將軍章			∨		○		○					○	—
<b>国内の中国古代金属製印章(J)</b>														
J①	騎督之印			∨	U	○				○				—
J②	漢匈奴惡適戸逐王				U				○					—
J③	漢婦義胡長			∨			○			○				—
J④	魏率善胡仟長			∨			○			○				—
J⑤	魏鮮卑率善仟長				U		○			○				—
J⑥	晋烏丸婦義侯			∨		○	○	○						—
J⑦	婦趙侯印			∨		○	○	○				○		—
J⑧	親趙侯印			∨		○	○	○				○		—
J⑨	晋蛮夷率善邑長		鉢				○		○			○		—
J⑩	晋蛮夷率善佰長			∨		○						○		—
J⑪	関内侯印				U		○			○				—
J⑫	軍曲侯印				U	○				○				—
J⑬	部曲督印			∨		○						○		—
<b>江戸時代の金属製印章(E)</b>														
E①	藤信昌印			∨		○	○	○					○	—
E②	左近衛権少将章			∨		○	○	○					○	—
E③	敬止				U	○	○	○					○	—
E④	惠南楼			∨		○	○	○					○	—
E⑤	源治昭印			∨		○	○	○					○	—
後漢の金工技術事例		可	可	可	可	可	可	可	可	可	可	可	可	可
江戸時代金工技術水準		可	可	可	可	可	可	可	可	可	可	可	可	可

『漢委奴國王』金印・誕生時空論 - 金石文学入門 I -』より転載 (改変)

(5) 線彫り金印三顆

このように見ていくと、『金印・誕生時空論』で述べた、「線彫り金印三顆」と題した「廣陵王璽」と栄豊齋所蔵「平阿侯印」と藤井有鄰館所蔵「関中侯印」の三顆の印章の文字彫刻技法の特殊性が浮かび上がる。この加工法は、20世紀の流通古文化財の溝に共通するところがある。その特徴は曲線の加工に現れている。小刻みなたがね痕が残っていること、文字線の端部にV字形たがねの痕が残っていること、などである。古代の出土印にこうした加工痕を持つものを筆者は知らない。「平阿侯印」と「関中侯印」は流通古文化財であり「廣陵王璽」は新発見資料である。

以上のことから、20世紀初頭のころ流通古文化財製作集団がどこかに存在し、21世紀の今、その流れを引き継いだ21世紀の流通古文化財製作集団が存在していることを認めなければなるまい。このことは、神田喜一郎氏が指摘するように「漢魏から晋あたりまでの印であります。なかにはいささか疑わ

しいものもありますが」と述べ、大谷榮誠氏の収集になる大谷大学蔵印の図録『中国古印図録』の例言には「なかには、一部真偽のまぎらわしいものもないではないが」とあり、近年では福岡市博の佐藤一郎氏が「来歴不詳の古印は、後代に偽造された可能性も考慮せねばならない」とするように、宋代以降複製が絶え間なく行われてきた古印を取り扱う歴史学研究者は、極めて慎重な姿勢を崩してはいないが、具体的な複製の排除方法を示すことは出来ていない。いま流通古文化財や新発見資料について、改めて新しい方法による検証が求められる時代である。出土資料が増えた今、先ずはものさし作りから始める意味でも、出土品に限定した考古学的研究が望まれるし、それが現代の考古学者の責務であろう。

## 2. 大塚紀宜氏「駝鈕改作」説について

### (1)大塚氏の型式分類について

大塚氏は、「漢委奴国王」金印の鈕形について、「蛇を表現した鈕の形態としては不合理な点も存在する。」とし、「漢委奴国王」金印の鈕形の原型は「漢廬水佰長」銅印を含むⅡ類の駝鈕印にあることも想定可能である。」とした。その形態について、氏は「金印の詳細観察と中国古代印章との比較 —特に駝鈕印について—」において、駝鈕印の分類を示し、更にそのⅡ類を「漢委奴国王」金印の類型と捉えた。

先ずは氏の分類には流通古文化財が含まれている可能性があることから、ほとんど信頼できない。さらに「最も形態が近いとみられる類型はⅡ類であるとみられる」(大塚2)と述べるのであるが、Ⅱ類と「漢委奴国王」金印に共通する形態とは何なのかそれを表す図版は全く示されていない。これでは読者は検証できない。本来、研究論文というのは、そこで示された写真や図版によって検証できるように執筆する。今回のように一部の資料について不明瞭な写真と実測図という名の形態や加工痕が見えない図を示すだけで、氏の指摘するようなⅠ類からⅥ類までの形態の違いや「漢委奴国王」金印とⅡ類の駝鈕印との近似性を検証せよというのであろうか。大塚氏の論考は論文としての必要要素を提示していない。

前段の論考の中で、「印章の年代については、駝鈕印、馬鈕印の多くが印文の文頭にその時代の王朝名が記されていることから、印文に記された王朝名を印の製作年代と推定することとする。」と述べ、更に、「漢委奴国王」金印の項でも、「加えて異民族に下賜された印章ということもあって、印文の文頭に中国の王朝名が記載されていて時期の特定が容易である。また、下賜した民族名・部族名も記載されていることから、配布先による分類も可能と想われる。このように、鈕の形状と印文を関連させて分類・編年を行ったものが図3(分類編年案)である。」とした。これでは、流通古文化財に記された「漢」や「魏」や「晋」の王朝名をそのまま信じて編年案を作ることになってしまう。過去に懸念を表明した研究者たちの成果をどのように受け止めているのだろうか。

そもそも、「漢委奴国王」金印の真贋を問う論考において、真贋のはっきりしない流通古文化財を資料に加えて分類を示し、さらにそこに当てはめて考えようということに矛盾がある。「漢委奴国王」金印の出自を比較検討するために、その「ものさし」つくりとして、まずは出土資料を基にして分類を試みて欲しい。

### (2)「駝鈕改作」説について

氏が提案した「駝鈕改作」説について、筆者は「Ⅱ類と「漢委奴国王」金印に共通する形態」とすることに大いに疑問を抱いているが、それが妥当であると仮定して「駝鈕改作」を考えると、大塚氏の説

は、江戸時代製作説を補完するものとなる。私は氏の提案を最初に聞いたとき、「古代人がなぜ改作しなければならないのだろうか?」と思った。この改作が江戸時代であれば容易に推定が出来ることである。それは次のような理由による。

筆者は「駝鈕改作」の工程を次のように考えた。

<想定される改作の工程>

- ①駝鈕の銅印があってそれを一次原型とする
- ②それを寒天型<sup>2</sup>などで型どりし、
- ③寒天型を割って一次原型を取り出し
- ④その空隙に蠟を流して蠟原型をつくる
- ⑤寒天型から蠟原型を取りだし、
- ⑥駝鈕の蠟原型を蛇鈕に改作する。

この時、へらで線彫りし、円文（魚々子文）を施文する。

- ⑦蛇鈕の蠟原型に土（真土）を被せて鑄型をつくり
- ⑧鑄型を乾燥・焼結して、同時に蠟を流し出す
- ⑨溶けた金を流し込んで鑄造する

この⑥の工程で改作が行われたとするのが妥当である。「漢委奴國王」金印の鈕のへらによる線彫りや円文の砂目の生成理由が明確になる。また、氏が指摘する二度手間、つまり「まず後漢代の駝鈕印を極めて正確に模写して印を作成し」という工程は全く無用となる。現実には駝鈕印が江戸時代の人々の手にあったかどうかという点については、こうした改作説の検討には様々な可能性を想定しておかなければならない。「江戸時代の人々は駝鈕印を手にするのは無かつただろう」などの推定は全く用をなさない。様々な印譜が隣国中国からもたらされていたことは史実であるから、その周辺の文化要素、つまり金属印の一部も我が国に入っていた可能性は十分に考えられよう。

さらに、氏は「類例の知られていない蛇鈕に作り変えるのも全く説明できないことであろう」とするが、「漢委奴國王」金印の蛇鈕の類例が見つかっていない現状では、この蛇鈕を古代に作ったと考えることにこそ無理があるというものである。

氏は「ただ駝鈕印の中で各類型を比較した場合、「漢委奴國王」金印に最も近い形態的な要素をもつものがⅡ類であり、Ⅱ類に比定される後漢代の駝鈕印と共通性を持つことを考えると、「漢委奴國王」金印の鈕の形態の成立や下賜された状況について考える重要な参考資料となると想われる。」と述べるが、そのⅡ類とする分類案に流通古文化財が含まれ、さらにⅠ類からⅤ類までの違いがどこにあるか分からない分類案では、全く従うことができない。さらに「最も近い形態的な要素」とは何なのか、説明をしていただきたい。

### 3. 石川氏「金印真贋論争は「本物」で決着した!」と「金印「漢委奴國王」の字形」について

今年の4月であったか、ある日突然『新説・新発見の日本史』という雑誌が工芸文化研究所に送られてきた。開けてびっくり、石川氏のインタビュー記事が載っていた。その主張のいくつかについて疑問点を述べてみたい。

<sup>2</sup> 古代蠟型鑄造法における寒天型の使用については、鈴木勉 2014「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その12 「大伽耶龍鳳文環頭大刀の外環製作方法と復元実験」に対する李漢祥教授の反論」『文化財と技術』第6号、を参照ください。

## (1)金印の金の純度について

石川氏は、金印の金の純度を 95.1%と考えているが、その数値の信頼度については考慮に入れていない。分析を行った本田光子氏らは、金の純度を 95.1%と報告しているが、石川氏はその「数値」だけを使って論考の重要な部分を取り上げない。本田氏らは、

「金印は平滑な面の測定が可能であり、銹や汚れもないので、今回のような非破壊の蛍光X線分析で比較的信頼性の高い半定量値が得られるものと判断した。＜中略＞得られた数値はこの測定点については有効であるが、遺物の材質を代表するものではなく、目安に過ぎないことをお断りしておく。」

とする。さらに、本田氏は「5. 考察」で次のように述べる。

「漢委奴国王」金印について金：銀：銅 95.1：4.5：0.5±0.5%という半定量値を得た。金製の印は数多くあるが、その元素組成がわかっているものはない。＜中略＞いずれにしても現時点では金印の材質を論ずることはできない。」

それにもかかわらず石川氏は 95.1%の数値を取り上げて真贋を問うている。石川氏は何故にそれを取り上げたのであろうか。

## (2)江戸時代の金の純度について

石川氏は、95.1%の数値に基づいて、江戸時代、元文年間以前の小判の純度が 85%台だとして、「金は厳重に管理されているはずで、偽造しようと思ったら小判を使うしか考えられません。」と述べる。ところが、井澤英二氏（九大）は、江戸時代の黒川金山、金鶏金山、保金山の金粒の金位を E PMA<sup>3</sup>で計測した数値を論考の中で示している<sup>4</sup>。それによれば、金位 86～99.6%、平均 93%だという。ものづくりの人々の原料調達はその技術の内であり、金はその金位によって色味を変える。金位はものづくりの人々にとって大変重要なのだ。「金は厳重に管理されているはず」とするのは、石川氏の思い込みに過ぎない。

## (3)蛇鈕の型式分類について

石川氏は「古そうな鈕形のものには確かに字形も古く、新しそうな鈕形は確かに字形も新しいことがわかります。そうするとこの金印の鈕形は前漢後期から後漢への過渡期であることがわかりました。鈕の形からも問題ない。」としたが、その根拠となる画像は全く示されていない。この画像を求めたい。

## (4)字形について

石川氏が指摘する「王」字の時代性については、金石学研究者の常識の範疇に入る問題である。さらに「漢」字のさんずいについても、「國」字の「戈」の第一画が直線になることも同様の問題であろう。氏は「漢委奴国王」金印の文字が、後漢初期に相当するものだという事に熱心であるが、氏の言う「後漢時代」は「後漢以降の時代」を意味する。宋代以降複製が繰り返されてきた漢・魏・晋の印章について、後漢だけの特徴を抽出するのはまず不可能である。問題は江戸時代にその文字デザインが不可能かどうかなのだ。

石川氏は『好古日録』に記載された「親魏倭王」印の陰影（図 16）を取り上げて、藤貞幹が前漢と後

<sup>3</sup> E PMA（電子線マイクロアナライザ、Electron Probe Micro Analyzer）で、蛍光X線分析とは異なり、定量分析が出来る装置

<sup>4</sup> 井澤英二



漢の「王」字の違いを認識できなかった例としたのであるが、これは論理に問題がある。金印を後漢の「王」字に作るためには前漢と後漢の「王」字に対する正しい知識がなければならないとするのは全くの誤解である。知識が無くとも後漢式の「王」字に作ることはいくらでもあるからだ。後漢以降の時代に多く通用している「王」字は後漢時代の「王」字に近い形をしているのだから容易に作る。「漢」字のさんずいが緩やかに曲がる事例も同様に多くの宋代以後の篆刻の中に見いだすことができる。さらに「國」字「戈」字の第一画がまっすぐになるのも、第三画が屈折するもの、第四画が横L字形になるのも、前漢時代から後漢以降の時代に多く通用している。いずれも江戸時代ではごく当然の形態である。

(5)調査する印譜は『集古印譜』だけで良いのか

数多ある印譜の中で『集古印譜』を選んだ意味はどこにあるのだろうか？

そもそも印譜は、篆刻を生業とする人は、自身の印譜を作る。つまり100人の篆刻家がいれば100種の印譜が存在する。彫金師は彫金譜を自ら作る。自身の作品や師匠の作品の拓本(朱拓が多い)を採って、収集するのだ。印刷技術が十分でない時代、自身で作成した印譜こそが自分の飯の種なのだ。印譜というと、『集古印譜』や『飛鴻堂印譜』などの公刊されたものをイメージしがちだが、それも数十部が良いところで、普通の人保有することはできない。となれば、篆刻家たちは自分で模刻したり写生したりして自信の印譜の充実をはかる。その印譜の顆数はまさに自分の仕事の幅を決定する。過去に多くの金石学者たちが、「漢委奴國王」金印の研究のためには印譜の調査の必要を感じていたことは容易に想像できるが、印譜の悉皆調査を実施すると、それこそ天文学的に不可能と想定される作業量であるし、印譜を集めることも極めて難しい。『集古印譜』だけを調べて、そこに見当たらないからといって、「偽物である可能性の低さは天文学的な確率と想います。」と述べる石川氏の考えを改めてお聞きしてみたい。

(6)「駝鈕改作」について

石川氏は「そのなかで南蛮、南方の民族にあげたものはどうなっているか調べてみると、全部で四十一例で、駝鈕が一番多いんです。そのなかに蛇鈕に再加工されたものがありました。日本国内の博物館で所蔵する古印にも、駝鈕を再加工した実例があることも確認しています。」と述べているのだが、本当に再加工されたものかどうか、図版を提示していただきたい。さらに論考の客観性とはいかなるものなのか、問いたい。

#### 4. 本田浩二郎氏「国宝金印「漢委奴國王」の鈕孔に関する視点」について

<注記>

本原稿は、当初本シンポジウムで発表する予定でいた論考の原稿の一部である。ところが、主催者の都合で三浦氏と筆者はコメントだけとなってしまった。そこで、論考の一部を抜粋して提供することとした。そのため、本原稿は文献の出所の明記など、様々な条件を満たしていない。これも時間が不足したためである。なお、本原稿は、書き改めて工芸文化研究所紀要『文化財と技術』第9号(2017年度刊行の予定)に掲載する予定である。

また、流通古文化財に関する論考は、購入担当者には大変失礼なことになると思われるが、『金印・誕生時空論』に疑義を唱える大塚氏らが流通古文化財への配慮を欠く論考を発表しているため、やむなく公表することとした。購入担当者には伏してお詫び申し上げると同時に、学問のためとしてお許しいただきたい。

以上